

氏名（本籍）	佐藤 学
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第 7413 号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	支持体から見る絵画表現 —絵画における支持体の機能についての考察、ならびに和紙を用いた絵画制作の検討と実践—
主査	筑波大学教授 博士（芸術学） 仏山 輝美
副査	筑波大学教授 博士（芸術学） 守屋 正彦
副査	筑波大学教授 藤田 志朗
副査	東京芸術大学准教授 博士（文化財） 荒井 経

論文の内容の要旨

（目的）

本論文は、絵画における支持体の働きと役割を見直して、絵具層を支える単なる物理的な基盤としての位置付けを覆し、支持体の性質や形状を活かした絵画表現の展開の手立てを明らかにすることを目的としている。

（対象と方法）

本論文の目的を達成するための課題は次の三つである。一つ目の課題は、日本画の支持体に用いられる和紙に注目して、純粹美術の移入に伴う日本画の近代化において和紙の働きと役割がどのように変化していったのかについてまとめ、支持体の特性に基づく絵画表現の意義を明らかにすることである。二つ目の課題は、和紙をはじめとする支持体の性質や形状をどのように絵画表現の内容や方法に関係づけるのか、その具体的な手法を探究することである。そして三つ目の課題は、和紙を用いた絵画制作を実践し、支持体との密接な関わりによって作品を表すことである。以上の課題について、関連する文献、展覧会図録、美術雑誌、作家へのインタビュー、作品の実見調査をもとに考察を展開し、和紙をはじめとする支持体の「継ぎ」、支持体の「形状」、描画における「和紙の性質と水の作用」といった観点で、支持体の特性に基づく絵画表現の手立ての検討と作品制作の実践および検証を実施した。

（結果）

一つ目の課題については、第1章および第2章で論じている。第1章では、日本画における本紙の在り方を参照しながら、支持体の概念が受容された経緯を論証し、支持体としての和紙が成立した過程を明らかにしている。さらに、戦後の日本画において、油彩画に見るような重厚な画肌や試行錯誤を伴う描画が和紙の上で実践されていることについて述べ、絵具層を支える物理的な基盤としての支持体の役割が和紙に定着し現代に至っていることを指摘している。第2章では、日本画制作における下図に着目し、そこでの線や形態を抽出するための試行錯誤が本画の在り方につながっていたことを述べて、近代以前の日本画に見られる和紙の機能について再評価している。画面の余白は紙という物質であると同時に絵画空間の奥行きであることについて言及し、そもそも日本画においては支持体である和紙の性質や形状に即して作品の形態や画面の表情が導かれていたことを指摘した上で、そうした本画の在り方に支持体の特性に基づいた絵画表現の可能性を見出すことができるとしている。

二つ目の課題は、第3章および第4章において検討されている。考察の主な対象は、三瀬夏之介（1973-）、諏訪直樹（1954-1990）の作品とその制作方法である。三瀬の取組については、イメージの一つ一つであると同時に複数の小さな支持体でもある紙片の「継ぎ」が像の形成と絵画空間の構築を促進していることに言及している。諏訪の作品については、支持体の「形状」が表現内容と描画行為に密接に関わっていることを指摘した上で、その支持体は描画を支える基盤に止まるものではなく、支持体の形状そのものが作品であるといえるほどに意味を持ち機能していることを見出している。また、作品が床の上に自立する立体物であることについて触れ、その展示空間においては多方向から作品を捉えるための視点の移動が求められていると述べている。その他、第2章の中で、「和紙の性質と水的作用」を活用した前田清邨（1885-1977）の絵画表現を挙げ、支持体の特性に基づく描画方法の一例としている。

三つ目の課題は、著者自らの制作実践を通して検討され、その一連の制作に関する記録と考察を第5章にまとめている。支持体である和紙を活かした絵画表現を実現するべく「和紙の継ぎ」「和紙の形状」「和紙の性質と水的作用」に留意して制作した自らの作品を振り返り、小さな和紙を一つ一つ継ぎながら制作する著者の手法が、紙片そのものを絵具に見立て、かつ筆に見立てた描画行為であること、また作品の形態は無数の紙片の集合体によって形成されるオブジェであることを明らかにしている。そして、絵画でありかつオブジェであるともいえる作品は、純粹美術としての絵画の枠組みを超え出た造形物として現実空間に参入し、展示する場の環境や歴史的背景を取り込んでより豊かに成立し得ることを実証している。

以上の考察から、作品の形態や画面の表情に密接に関わる支持体の機能を明らかにし、それに基づく絵画表現の活性化と展開の手立てを呈示している。

（考察）

支持体に注目しその性質や形状に寄り添って表現する方法は、支持体そのものの物質性に依拠することでもあり、作品は絵画であることから遠ざけられ、結果名づけようのない物体に行きついてしまうといった可能性もある。また、オブジェ化によって作品と現実空間との結びつきが強められる一方で、表現内容は現実空間という外部性に依存することで成立するといった状況にあるともいえる。著者の取組が絵画表現であるというとき、あるいはまた近代以前の日本画の画面に和紙を用いた絵画表現の可能性を見出すというとき、絵画の枠組みを超えてオブジェ化していく作品を前に著者は内在する絵画空間の奥行きやイリュージョンにどのように向き合うのかといった課題が想定される。

審査の結果の要旨

（批評）

近代以前の日本画における本紙の在り方を参照し、和紙が画面の最下層にあって絵具を支える基底材として認識されていった経緯を検証して、現代日本画の特質と課題を支持体という視点から解明したことは高く評価できる。また、絵画における支持体の機能を多面的に捉え、支持体の性質や

形状によって表現内容と方法を活性化するという提案と実践は独創的である。和紙という支持体を用いた絵画表現の多様性を示しながら、美術、絵画、日本画といった従来の制度を揺さぶる脱領域的な視座、もしくはさらに彫刻や工芸といった分野の性質を加えた複合領域的な視座に立って新たな造形表現の可能性を見出した考察であると評価できる。

平成 27 年 1 月 14 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。